学院福音化2022年10月

１０月の序論のポイント５つ

１．聖餐式

イエス・キリストの十字架の恵みによる救いに対する確信と感謝

２．集 中

私たちの霊的状態が変わった。　死　→　いのち　＝再創造

３．特別祈り

神様の絶対計画、エジプトや荒野のような今のところに

４．定刻祈り

たましいは、みことば祈りによって生きる（いやし）

５．まことの答え

御座の力、時空を超越した神の国の祝福をこの世でも味わう

第３課　イエス様が教えられた福音の働き（マタイ 20:17-19）

フォーラムのポイント　「１デナリのめぐみ」

第３課では、ぶどう園の労務者の比喩（たとえ）について見ます。
マタイ 20:1 を見ると「天の御国は、・・・ようなものです。」とあります。
ぶどう園の労務者のたとえは、天国のたとえです。
それゆえ、先に天国について、どういうものかを知る必要があります。

＜天国とは＞

イエス様がこの世に来られて、十字架で死なれた理由は、神様が選ばれた民に永遠のいのちを与えるためです。永遠のいのちとは、単純に長生きすることを意味するのではありません。なぜなら、地獄でも死なずに長生きするからです。永遠のいのちとは、まことのいのち、神の国のいのちのことを言います。

＊永遠のいのち＝神様とイエスを知ること

ヨハネ 17:3

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

ヨハネ 17:3 のみことばは、神様が神様ご自身をイエス様の中に啓示しておられるので、イエス様がだれか、イエス様を通して神様がだれなのかを知らなければ天国、神の御国で生きることはできないということです。簡単に言えば、イエス様が天国で、天国はすなわちイエス様だということです。

ですから、イエス様が公生涯を生きている中で、次のように言われました。

「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」

ルカ 17:21「『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」

このみことばから、イエス様ご自身が天国としてこの地に来られていることを言われています。

つまり、天の御国は、私たちが探して行く所ではなく、私たちに、私たちの中に訪ねて来られたことだと理解して、ぶどう園の労務者のたとえを黙想しましょう。

１．１節「天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。」

天国は、場所を意味するのではありません。父なる神様のみこころを知ることです。ひとり子であるイエス様をも惜しまず与えてくださったことを通して現してくださった神様の愛を知ることです。

イエス様の中に込められている父なる神様のみこころ、そして、私たちに対する神様の愛（アガペー）を知ることが天国です。

そのようにイエス様の中に込められている天国と神様の愛を知り、それを味わい告白して、賛美する状態、それが天国です。その主人の心を知る者たちには、讃美歌の歌詞のように、「山川、荒れ野も、いおりや城でも、主イェスを迎えて、いずこも主の国」（讃美歌「恵みに満たされ」３節より）です。

２．その主人である神様のみこころとはなんでしょうか

主人が労務者を呼んだのは、単純に仕事をさせることが目的ではありません。2,4,7節を見てみましょう。

2 彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。
4 そこで、彼はその人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』
7 彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』

このように「ぶどう園に行って仕事をさせた」とは書いてありません。もちろん、そこに行って仕事をしたでしょう。ただ、主人の目的は「ぶどう園に行かせること」であって、ぶどう園に行ってなにかをさせることが目的ではありませんでした。

6節を見ると

6 また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』

とあるように、なにか仕事ができる人々ではありません。

日雇い労働者というのは、朝に行って、呼ばれたら仕事に行くのですが、呼ばれなかったら、ずっと仕事があるまで待つしかないのです。一日中仕事もしないでそこにいたということは、その人々に仕事をする能力や

仕事ができる状態ではなかったということでしょう。だれが見ても、その人々には仕事をさせられないと思える人々だったのかもしれません。ぶどう園の主人は、そのような労務者たちをぶどう園に行きなさいと言ったのでした。

３．主人が労務者を呼びに出た

上に見たように、天国である主人が、労務者を呼びに出て来ました。（ぶどう園に呼んだというのは、天国に呼んだということではなく、天国である主人が呼んだということです）

1,3,5,6節を見てみましょう。
1節 天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。
当時のユダヤ人たちの仕事のはじまりは午前６時で、仕事が終わるのが午後６時でした。「朝早く」ということは、午前６時以前です。
また、３節「九時ごろに出かけてみると」
そして、５節「十二時ごろと三時ごろに」
そして、６節「五時ごろ」これは、仕事が終わるまで１時間しかありません。最後に呼ばれた人は、１時間だけ働いたのです。

天国は、私たちがいっしょうけんめいに努力して入るところではないということです。
日雇いで、一日に稼いだお金で自分と自分の家族の生活をしている人々、それがなければ飢え死にする人々、切実に日々の必要を求めている人々に手を差し伸べて、ぶどう園の主人は呼びました。彼らが糧を手に入れることができるように、生かすように呼びました。この主人によって呼ばれた人々の中には、何日も仕事がなくて、家族とともに飢え死にしそうな人たちがいたかもしれません。その日に仕事がなかったら、お金がないので、食べることもできず死んでしまう危機にいる人もいたかもしれません。そのような人々を生かすために、主人はその人々をぶどう園に行かせました。

４．１デナリ＝恵み

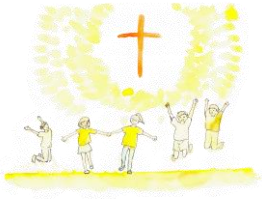
私たちがフォーラムする内容ですが、１デナリは同一の恵みの約束です。

主人はいちばん遅く来た人から賃金を渡しました。最初の約束どおり、１デナリを渡しました。５時に来た人は、１時間しか働いていないのに、１デナリをもらいました。それゆえ、最初から来ていた人たちは、もっともらえると期待をしたのです。彼らも主人から呼ばれないなら、飢え死にするような状態だったかもしれません。そんな状態だったことをすっかり忘れて、自分がもっと働いたから、もっともらうべきだと思ったのでしょう。

10 最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。
11 そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、
12 言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』

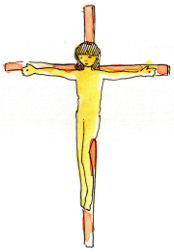
この人々も、もちろん、最初は自分たちに仕事をくれて、賃金をくれる主人に、とても感謝していたはずです。しかし、自分たちの仕事の量、内容と、他の人のを比べて、自分に恵みを与えてくれた主人に不平不満を言ったのでした。

そのとき、主人はなんと言ったでしょうか。13～16節を見ましょう。



13 しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。
14 自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。
15 自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』
16 このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

これが、主人の心です。最初に約束した１デナリをみんなに上げました。



イエス様がこのたとえを、だれに言われたのかを知る必要があります。
マタイ 18、19章に出て来る、選民思想にとらわれているユダヤ人や、律法主義に陥っているパリサイ人に対してのみことばです。
選民思想や律法主義にとらわれている人々は、恵みについて話しても理解できません。
ですから、ぶどう園の労務者のたとえの最後は、十字架で終わります。

17 さて、イエスは、エルサレムに上ろうとしておられたが、十二弟子だけを呼んで、道々彼らに話された。
18 「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子は、祭司長、律法学者たちに引き渡されるのです。彼らは人の子を死刑に定めます。
19 そして、あざけり、むち打ち、十字架につけるため、異邦人に引き渡します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

主人が最初から約束した１デナリは、労務者とその家族のいのちの糧を買うことができる金額です。
イエス・キリストの十字架の死とよみがえりを通して与えられる恵みの賜物（プレゼント）であり、永遠のいのちの約束です

救いは、私たちの行いや努力で得られるものではありません。
もしかしたら、私たちの信仰生活がユダヤ人やパリサイ人たちのように、選民思想、律法主義に陥っているのではないか。私が、他の人より長く信仰生活をしているので、神様にもっとたくさん受けるのではないかと、そのようなことで他の人をさばいたり、判断していることはないでしょうか。または、まだ解決できていない問題や病気、苦しみゆえに、神様をうらんでいないのか。自分の信仰生活を改めて点検してみましょう。

毎日生きる中で、いのちの糧であるイエス・キリストを通して、きょうも神の子どもの身分と御座の祝福を味わいながら、天国を生きるようになっていることを感謝する一日を送りましょう。